

新課程高校地理における評価のあり方とテスト

近畿大学教職教育部助教授 戸井田 克己

「答申」にみる評価法改善の動向

2000年12月、教育課程審議会はこれからの評価のあり方に関して答申¹⁾をおこなった。それによれば、「学力」というものはたんに知識の量によってのみ測れるものではなく、「自ら学び、自ら考える力」等の、いわゆる「生きる力」その他の能力が確実に育まれているかどうかによってとらえることが必要とされた(表1)。

表1 これからの評価の基本的な考え方

評価されるべき対象	その方法	その他の留意事項
①獲得された知識	1) 「目標」に準拠した評価	a.指導と評価の一体化
②基礎的・基本的内容の定着	2) 絶対評価の重視	b.多様な評価法の工夫改善
③自ら学び、考える力の獲得	3) 個人内評価の工夫	c.学校をあげた評価の取り組み

これは基本的には、5段階の相対評価を通例としてきた小・中学校での評価のあり方を改善するための提言であり、高等学校は直接の対象とはなっていない。しかしこのことは裏を返せば、高校では従来からも絶対評価が基盤にされてきており、表1の観点のいくつかはこれまでも導入可能であ

った(暗にそれが期待されていた)ことの反証でもあろう。

大学教育までも含む大きな教育改革の流れのなかで、高校における評価も、「学期末の一発勝負」的な定期考査の結果のみで成績を申し渡すようなことは許されない時代になってきている。

そもそも評価とは何か

これからの評価のあり方を考えるため、そもそも評価とは何か、なぜ評価するのかという

問題を考えておきたい。これは表1中のaとも密接に関わる事柄である。まず次の文章を読んでいただきたい。この夏、ある国

立大学の教育学部で4日間の集中講義をした際おこなったテストで、学生が書いた答案である。

「試験問題の作り方」についての講義が、やはり今後が一番役立ったと感じました。試験は一般には教師が生徒の学習の達成度を評価するために

するものにとらえられています。生徒側からすると、自分がランクづけされているようで嫌なものでしかありません。けれども本来、試験とは教師が生徒を評価し、生徒の達成度から教師自身も自己の指導法を反省するという双方向性を持っていることに気づかされました。教師自身が今後の指導に生かしたり、生徒は与えられた評価をもとに復習するなどして、フィードバック効果を持つものでなくてはならないと思います。

そう考えると、一連の単元指導の事前・事中・事後での3回の試験(評価)は必要不可欠となってくると思いますが、現状は教師が生徒を評価するだけにとどまっているため、事後の試験(評価)しかほとんどおこなわれていません。生徒も評価をその場限りのものと受け止めているため、定期試験だけが唯一の試験と思っています。まずは教師・生徒双方の意識改革が必要だと感じました。

出題したのは全部で4題あったが、これは「講義した6つのテーマのうち、最もよかった(興味深かった、役立った、わかりやすかったetc.)ものを一つ挙げ、その理由を具体的に述べなさい。」という問いへの解答である。近い将来、地理歴史科教師になるであろう学生たちに向けて発した筆者の考えを反映しているが、要領よくまとめられているので掲載した(この答案では「試験」という行為の前提条件が論じられているが、講義ではこれに引き続き、実際に出題された試験問題を素材にしてその良し悪しを具体的に検討した)。

答案に示されているように、①評価とは本来生徒に向かうベクトルと、教師自身に向かうベクトルとを併せ持ったものであるはずであり、②生徒に向かうベクトルは生徒の努力をほめてやったり、今後の学習課題に気づかせたりできるものでなければならない(教師自身に対しても同様の効果が期待される)。③そのためには、授業後の「定期考

査」だけが評価の対象となるべきでなく、平時の小まめな評価の積み重ねこそが大切なのである。

これは表1のaがいう「指導と評価の一体化」ということの意味である。

観点別評価と評価法の工夫改善

絶対評価や個人内評価(表1)を適切に取り入れるには、教師の主観によらない、評価の客観性が強く求められる。それには「評価基準」を明確にするとともに、総得点方式の定期考査だけに依拠しない「観点別の評価」が求められることになる。これについては先に引用した答申も強調するところであるが、高校地理においても、「社会的事象への関心・意欲・態度」「社会的な思考・判断」「資料活用の技能・表現」「社会的な事象についての知識・理解」等の観点を設定し、それらの観点から「学び方を学ぶ」「思考力を伸ばす」「地理的スキルを身につける」「地理的見方・考え方を培う」等といった地理教育がもつねらいの達成度を、個別的に評価するような取り組みが積み上げられていく必要もあろう。なお、この点については、次号(2003年2月号)で具体的に検討しよう。

また、資料1のような生徒自身による「自己評価」「相互評価」といった評価法を併用することも考えられる。最終的に評価・評定するのはもちろん教師だが、場合によっては生徒自身による評価をそのまま利用したり、評価させることを通して生徒の学習意欲を高めさせることが期待できる。

いわゆるノート提出について

ここで、いわゆる「ノート提出」についてあえて一言しておきたいと思う。学校によっては、学習への意欲や態度を評価する手立てとしてノート提出(ノートの評価)の頻度が高まることも予想されるからである。

これは従来からもみられた一つの評価法である

社会科の学習では、議論を生徒が調べ、それをレポートなどを通して発表するという活動が求められることが多い。下に示すのは、「身近な調査」で使用する他者評価と自己評価の例である。各自で採集課題をレポートにまとめ、それを他者評価コメントカードを使って班内で相互評価を行う。その後、コメントカードを統計し自己評価を行うという形式で作成している。

他者評価コメントカード () から () へ											
まかったところ	工夫したところがよいところ										
レポートの内容について											
発表について											
<p>＜評価項目＞</p> <p>① わかりやすいレポートでしたか。 5 - 4 - 3 - 2 - 1</p> <p>② レポートを通して物事を捉えたことが秀でていましたか。 5 - 4 - 3 - 2 - 1</p> <p>③ レポートを読んで、自分も何かはらねばと思いましたか。 5 - 4 - 3 - 2 - 1</p> <p>④ 発表はわかりやすかったですか。 5 - 4 - 3 - 2 - 1</p> <p>⑤ 心算図等の発表会・レポート作成時の発表評価は？ 5 - 4 - 3 - 2 - 1</p>											
<p>＊ みんなからのコメントカードの結果を再とめましょう。</p> <p>① 総合評定を記入しましょう。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>評価 A 字</th> <th>B 字</th> <th>C 字</th> <th>D 字</th> <th>E 字</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>◎</td> <td>○</td> <td>△</td> <td>□</td> <td>◇</td> </tr> </tbody> </table>		評価 A 字	B 字	C 字	D 字	E 字	◎	○	△	□	◇
評価 A 字	B 字	C 字	D 字	E 字							
◎	○	△	□	◇							
② コメントの内容をまとめましょう。											
(レポートの内容) まかったところ											
(レポートの内容) 工夫したいところ											
(発表) まかったところ											
(発表) 工夫したいところ											
③ あなたの今後の決意を述べてください。											

資料1 相互評価・自己評価表の例²⁾

が、その際、高校段階ともなれば、「ノート的美しさ」だけで高い評価を与えるのはいかがなものかと思われる（筆者がかつて勤務したある高校ではそのような先生方が散見された）。美しいノートは「ただ黒板を写すだけ」に集中した結果である可能性があり、「自ら学び、自ら考える力」とは対極をなすものではないかと感じられるからである。

「黒板に書かれなかったこと」をいかに記録するか、そうした思索や思考の跡を正當に、かつ厳しく評価してやれるノート提出のあり方、またその前提としての「ノート指導」が模索されてほしい。

テスト問題の工夫改善に向けて

とはいえ現実を考えると、学期末や学期中間に

おこなわれる一斉テストがなお評価の中心になるであろうことも相違ない。その意味で、テスト問題自体にも、「学び方を学ぶ」「思考力を伸ばす」「地理的技能を身につける」「地理の見方・考え方を培う」などといったねらいが達成でき、それが評価できるような中身が含まれていることが望ましい。そのようなテスト問題を例示する紙幅の余裕はここにはないが、本誌「地理・地図資料」の特集号³⁾がそうしたテスト事例を豊富に掲載しているのもそちらをご覧いただきたい。また筆者自身も、「良い問題」と「悪い問題」の分析を具体的な問題レベルでおこなってきた⁴⁾。併せてご参照いただければ幸いである。さらに、古今書院の雑誌「地理」が2度にわたってテスト問題の特集⁵⁾を組んでいる。どちらも具体的な問題を挙げての検討であり、問題改善に向けたヒントを提供してくれる。

これらの論考は、地図・グラフ・図表・読み物などの資料を適切に用い、「分布と分散」「最大と最小」「位置関係」「経時変化」「比較と関連」等といった地理の見方・考え方を駆使して正解するような問題をよしとする点で共通しているといえよう。そうしたテスト問題のいっそうの開発と蓄積とが望まれる。

また一方で、基礎的・基本的な内容や知識の定着を答申(表1)も重視している。教師が「基礎・基本」と考える事柄については、ぜひ自信を持って問い続けていきたいものである。

注

1) 教育課程審議会「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について(答申)」平成12年12月

2) 北尾倫彦・祇園全祿編『[平成14年版]新観別学習状況の評価基準表 中学校・社会-単元の評価規準とABC判定基準-』(図書文化社2002)による。

3) 「特集 新学習指導要領の評価のあり方 地理Aテスト例」(「地理・地図資料」2002年5月号 帝国書院)

4) ①抽稿「テスト問題作成のコツと急所」(寺本潔・井田仁康・田部俊充・戸井田克己著『地理の教え方』古今書院1997) ②抽稿「地理的な見方考え方を問うテスト問題の作成法」(星村平和監修・原田智仁編『社会科教育へのアプローチ-社会科教育法-』現代教育社2002)

5) ①「特集 試験問題を考える」(「地理」36-4 古今書院 1991) ②「特集 試験問題が問題」(「地理」45-6 古今書院 2000)